

近代以前の熱田神宮社叢の林相の変遷

橋本 啓史⁽¹⁾ 多和 加織⁽¹⁾ 松浦 文香⁽¹⁾ 長谷川 泰洋⁽²⁾

⁽¹⁾ 名城大学農学部 〒468-8502 名古屋市天白区塩釜口1丁目501

⁽²⁾ 名古屋産業大学現代ビジネス学部 〒488-8711 尾張旭市新居町山の田3255-5

The Vegetative Landscape Changes of Atsuta Shrine in Nagoya, Japan, in Pre-modern Times

Hiroshi HASHIMOTO⁽¹⁾ Kaori TAWA⁽¹⁾
Ayaka MATSUURA⁽¹⁾ Yasuhiro HASEGAWA⁽²⁾

⁽¹⁾ Faculty of Agriculture, Meijo University, 501 Shiogamaguchi 1-chome, Tenpaku-ku, Nagoya, Aichi 468-8502, Japan

⁽²⁾ Graduate School of Environmental Management, Nagoya Sangyo University, 3255-5 Araichoyamanota, Owariasahi, Aichi 488-8711, Japan.

Correspondence:

Hiroshi HASHIMOTO E-mail: hihashi@meijo-u.ac.jp

要旨

熱田神宮の社叢は、現在は照葉樹と落葉広葉樹の大木が混在する植生となっているが、熱田神宮の本殿より南側の参道沿いなどは、大正時代以降の神域拡張整備に伴って植栽された樹林である。様々な絵図類を用いて特に近世から近代にかけての本殿周辺の植生景観の変化を明らかにした。現在は禁足地となっている本殿北側の樹林は、中世の頃からスギのような針葉樹に見える樹林に広葉樹のように見える樹木が混じる絵が描かれていたが、江戸時代後期の絵図ではスギのような針葉樹に見える樹林と本殿との間にマツのように見える樹木と広葉樹のように見える樹木が描かれており、文献からもスギやマツ類であった可能性が高い。明治時代の絵になるとスギのような針葉樹に見える樹木が減少し、広葉樹のように見える樹木が増加していた。

Abstract

The forest of Atsuta Shrine in Nagoya City, Japan, is an urban forest that presently comprises laurel and deciduous broad-leaved trees. However, woods in some parts of the shrine forest, especially the southern part, were planted after the Taisho Era (modern times). We estimated the vegetative landscape changes of Atsuta Shrine in pre-modern times based on several old drawings. The northern part of the shrine forest is now a restricted area. According to an old drawing from the 16th century, the vegetation of this area was a coniferous forest that consisted of mainly Japanese cedar with a small number of broad-leaved trees. Old drawings from the early 19th century also suggested that the vegetation of this area was mainly Japanese cedar with pines and broad-leaved trees, especially along the forest edge. Literature also suggests, it is likely to have been a cedar or pine species. However, according to old drawings painted in the Meiji era (late 19th century), the number of Japanese cedar decreased, and the area of broad-leaved woods increased.

受付日：2020年8月31日

受理日：2021年1月12日

はじめに

社叢は永く人手が入らず地域の原植生を伝える森として認識されてきたが(上田, 1984), 絵図等を用いた近年の研究から, 多くの社叢では現在の植生とは異なり, マツ類(アカマツ *Pinus densiflora* Siebold et Zucc.・クロマツ *P. thunbergii* Parl. など), スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don, ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. などの針葉樹が主で, 暖温帯にある関東や関西の社叢でも照葉樹は多くなかったことが示されてきている(小椋, 1992, 2012; 鳴海・小林, 2006; 今西ほか, 2008, 2011). また, 社叢のマツ類を伐採するなどの資源利用も行われていた神社もあったことが明らかにされている(今西ほか, 2008, 2011). しかし, 社叢の過去の樹種構成は全国一律ではないため, 地域の原植生あるいは現在の気候下での極相林の典型例として何がふさわしいかについては個別の判断が必要となる. よって, 過去の社叢の様子は, 地方ごと, 個別の神社ごとに明らかにしていくべきものである.

愛知県名古屋市市の市街地にある熱田神社は113年の創祀とされ, 長い歴史を持ち, 三種の神器のひとつである草薙神剣を祀ることから天皇家との関わりもあったことから, 多くの絵図類や史料が残されている. しかし, 絵図類を用いた中世熱田の建物の配置などについての論考は見られるものの(例えば新修名古屋市史編集委員会(1998)), 近代以前の熱田神社叢を構成する樹種の変遷について考察した学術研究は見当たらない. 『新修名古屋市史 資料編自然』(新修名古屋市史編集委員会, 2008)でも「比較的人為的干渉の少なかった環境が残って」と認識されている. 本殿背後には現在は神域として保護されている樹林が存在するが, 本研究では, 絵図類を中心とした史料を用いて中世から近代にかけての熱田神社本殿周辺, 特に本殿裏側の雲見山と呼ばれる神域の植生景観の変化を明らかにした.

過去の植生や植栽を明らかにする手法として, 日記・詩文・絵画などの史料, あるいは発掘による花粉分析や植物遺体の調査がある(飛田, 2002). 絵図類の利用による植生景観史研究のための方法論は, 小椋(1992)によって提案され, 多くの研究がこれに倣って行われてきた. 小椋(2012)は「絵図類の資料性を明らかにすることは難しいことも多いが, もしそれをなんらかの方法に

よって示すことができれば, 絵図類には文字や言葉ではうまく伝えにくい多くの視覚的情報が含まれるため, それは文献などから明らかにすることは容易でないかつての植生景観やハゲ山の存在などを知るうえでたいへん貴重な資料となる」と述べた上で, 絵図の資料性を明らかにするための方法論として, 絵図にまつわる情報を可能な限り多くつかむ, 他の絵図・文献との比較考察, 山や谷などの地形描写の分析的考察, 岩や滝などの特徴的なものの描写と現況との比較, 絵図の彩色の検討, 植生とは全く関係のない部分の景観描写についての考察, そして考察結果の総合的判断を挙げている. 本研究の対象地の熱田神社では, 遺跡の発掘調査は度々あるものの花粉分析や植物遺体の調査は行われておらず, 代わりに多くの絵図類や史料が残されていることから, 絵図類を中心に研究を進めた.

材料と方法

(1) 対象地

熱田神社は愛知県名古屋市熱田区に位置し, 現在の境内の面積は約19 haである. 熱田の地は, かつては海に近い港町で, 東海道の宿場町のひとつでもあり, 次の桑名宿への七里の渡し場として栄えた. しかし, 名古屋港の埋め立てが進み, 現在は海岸線から離れている.

熱田神社は西暦113年の創祀とされ, 日本武尊が尾張国造の御女・宮簀媛命に預けた草薙神剣を奉るとされる. しかし, 隣接する断夫山古墳の築造年代から, 現在の地に神社が位置するようになったのは尾張氏が熱田台地を統一した6世紀頃ではないかとの説もある(新修名古屋市史編集委員会, 1997). 熱田神社内遺跡では古墳時代の竪穴式建物や6世紀代の須恵器, 8世紀前後と考えられる瓦片が出土している(株式会社イビソク, 2009).

熱田神社の社叢は, 延宝5年(1677年)に書かれた『熱田太神宮正縁起一卷』(『熱田神社史料 地誌編』(熱田神社宮庁, 2015)所収)には, 「一夜の間」に「檜・椿・梧・槻」の「叢林」が出来たと記されている(後述するように, 他の縁起でも一夜にして林ができたとはされているが, 具体的な樹種を記したのはこの縁起のみのため疑問が残る). 約80年前発行の『熱田神社境域の植物』(熱田神社宮庁, 1942)では, 神門の跡地の分布から, かつて

の境内地は現在の数倍以上の広大なものであった様と推定し、現在の境外摂社・末社の各境内地は「樹木鬱蒼と生い繁った往昔の本宮境内の一部であった」と推定している。現在(1970年代)の神宮北部はムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch. の優占度が大きく、クスノキ *Cinnamomum camphora* (L.) J.Presl がこれに次いで優占する植生となっている(名古屋営林

局・緑のプロジェクトチーム, 1978)。南側の参道沿いや、本殿より北でも北側と西側の道路沿いなどは、別宮・末社周辺などを除き、大正時代以降の神域拡張整備に伴って植栽された樹林である(図1)。特に1927年の遷宮の際の設計は、明治神宮の設計にも関わった建築家・伊東忠太によるもので、当時熱田神宮林でも煙害によって針葉樹が衰退傾向にあったことから、明治神宮の植栽に倣って照葉樹などの煙害に強い樹種が選ばれている(熱田神宮宮庁, 1966)。

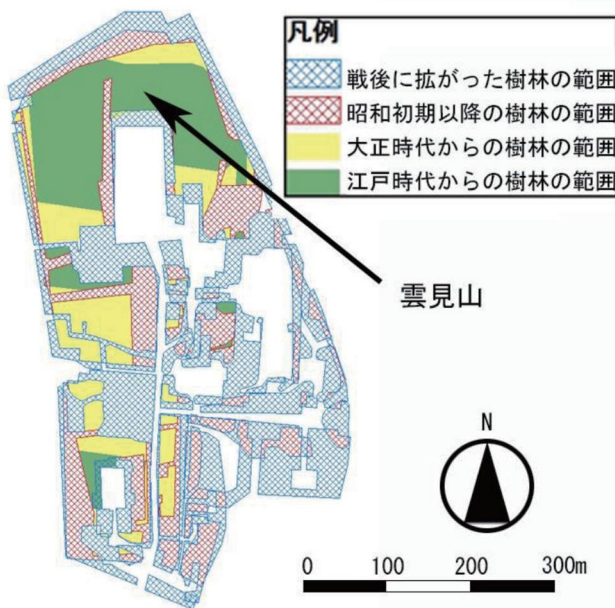


図1 現在の熱田神宮の森の範囲の成立時期(『尾張志付図 熱田』(名古屋市蓬左文庫蔵), 『熱田神宮昭和造営誌』, 『熱田神宮境域の植物』, 『平成22年度名古屋市都市計画基本図』(名古屋市発行)を基に作図)

Figure 1. Dates of establishment of the wooded areas of Atsuta Shrine.

表1 参照した古絵図あるいは境内図などが掲載された古書

Table 1. The old paintings and figures in books referred in this study.

時代	作成年	西暦	書名	作者	所蔵
室町時代	享禄2年2月	1529	熱田社参詣曼荼羅図	加野和泉祐筆資信	徳川美術館
室町時代	16世紀前半のころと考えられる		熱田神宮古絵図	不明	熱田神宮
江戸時代	慶長18年	1613	熱田社境内図	不明	名古屋市博物館
江戸時代	宝暦2年	1752	張州府志 附図	松平君山	鶴舞中央図書館
江戸時代	文化3年	1806	熱田宮全圖	高力種信	白鳥山法持寺
江戸時代	文政9年以降	1826	熱田祭典年中行事図会	高力種信	名古屋市蓬左文庫
江戸時代	天保9年	1838	名陽見閩図会 第五編(上)	小田切春江	東洋文庫
江戸時代	天保12~15年	1841	尾張名所図会 前編卷三	小田切春江	愛知県図書館
明治時代	明治7年	1874	熱田神宮神境図説	不明	鶴舞中央図書館
明治時代	明治15年	1882	官幣大社熱田神宮真景図	小田切春江	熱田神宮
明治時代	明治24年	1891	熱田神宮並別宮境内図	小田切春陵	熱田神宮

(Hook.) H.Wendl. (あるいはトウジユロ *T. wagnerianus* Hort. ex Becc.) のような樹木が2本描かれているのみである。なお、シュロと考えられる樹木がこの時代のほかの寺社でも2本で植栽されていたことが、熱田神宮のこの『春日権現験記絵』の絵図のことも含めて瀬田(2000)によって指摘されている。

2) 近世

近世・江戸時代に熱田神宮を描いた絵図が増えるが、江戸時代前半のものは少ない。実は江戸時代初期、しばらくの間遷宮が行われず、境内は荒廃していた。松尾芭蕉が1684年に『野ざらし紀行』の旅で熱田を訪れたのは最も荒廃していた頃だったが、翌年幕府の援助が得られて遷宮が行われ、3年後の『笈の小文』の旅での訪問時には立派な社となっていて、芭蕉は賛歌する句を残している(名古屋市経済局観光貿易課, 1979)。

江戸時代の初期の植生景観は、1613年に樹木も描かれた平面図である『熱田社境内図』(図3)を参照したが、同時代の樹木を描いた絵図が他になく、客観性に劣ることは認めざるを得ない。ただし、現在神域となっている社殿裏の描き方には興味深い点も見られる。

江戸時代後期の植生景観は、高力種信が1806年に熱田神宮境内のみならず周辺の末社までをも1枚に描いた肉筆画である『熱田宮全圖』を参照した。高力種信(1755~1831)は尾張藩士で、「猿猴庵」という号で細部まで描いた実景描写を原則とした記録物を中心に、多様な作品を残している(名古屋博物館 1986)。この『熱田宮全圖』は、『熱田神宮圖録』(1935年刊; 国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧可能 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1208410>, 2020年8月30日確認)にモノクロ写真が所収されていたが、一時所在不明となり、西尾市岩瀬文庫が所蔵する藤原克楨の転写図の方が様々な資料で紹介されていた。しかし近年、京都の古書店で自筆図が見つかり、熱田神宮近くにある白鳥山法持寺の所有となった(川口, 2012)。今回、この図の転載許可は得られなかったが、個人出版の『熱田 白鳥山法持寺史』(川口, 2012)にカラー写真が、『熱田 白鳥山法持寺史』補遺考』(川口, 2014)にはモノクロ写真が掲載されている。川口(2012)は自筆図と転写図を比較して、地名の誤りのほか、転写図の方が多くの彩色を使用

して鮮明になっていることを指摘している。このことは樹木についても言え、『熱田 白鳥山法持寺史』(川口, 2012)に掲載された自筆図と転写図を筆者らが見比べると、赤く紅葉した樹木が転写図の方に多く描かれているなど、樹林内の樹木については正確な模写となっていないことが明らかで、転写図から当時の植生景観を推定することは誤った結果をもたらすことがわかった。なお、『熱田宮全圖』よりも前に描かれた1752年の『張州府志附図』は平面図で、樹木は清水社の東におそらくクスノキ巨木と思われる樹木が1本描かれているだけであるが、現在神域となっている社殿裏の描き方には興味深い点も見られる。今回この図は転載していないが、この図は国立国会図書館デジタルコレクション(<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/935906>, 2020年8月30日確認)で閲覧することができる。1789年の『張州雑志』には本殿周辺の境内の樹木が描かれているが、肝心の本殿裏の樹林の様子が描かれていない。また、『熱田宮全圖』より約35年後の1841年の弟子の小田切春江(1810~1888)による図書『尾張名所図会 前編卷三』では「熱田大宮全図」と題する6ページにもわたる絵が掲載されているが、本殿裏の樹林の様子は、林縁部は描かれているものの、後方は省略されているので、参考に留めた。なお、今回この図も転載していないが、愛知県図書館貴重和本デジタルライブラリー(<https://websv.aichi-pref-library.jp/wahon/pdf/1103264375-001.pdf>, 2020年8月30日確認)などで閲覧できる。

江戸時代後期の植生景観の傍証として、1826年以降に高力種信が描いた全10巻からなる『熱田祭典年中行事図会』を参照した。『熱田宮全圖』と同じ描き手ではあるが、後年の作品で、境内全体の図ではなく、多数の場面から成る絵図である。年中行事の祭祀を行う人物だけでなく、背景の建物や樹木も写實的に描かれていて、同じ樹林を別角度から描いたものもある。この中から特に本殿周辺の樹林を描いている12の場面(表2, 図5)の図を参照した。なお、高力種信はこれより以前の1796年に『寛政七年熱田正遷宮絵図』(模写を名古屋市立鶴舞中央図書館蔵)を描いているが、現存するものは模写であるためか、樹林については写實的な絵とは言えないので、今回は採り上げなかった。

小田切春江によって1838年に描かれた『名陽見聞図

会 第五編 上』の「端午 馬の頭」の図は、鳥居から本殿方向を描いた図で、本殿後方の樹林のスカイラインがかろうじて描かれているので参考にした。この図も今回転載していないが、財団法人東洋文庫所蔵画像データベース (http://124.33.215.236/gazou/index_img.php?tg=H3&c1=%E3%81%BE, 2020年8月30日確認) で閲覧することができる。

3) 近代

明治時代以降は、写真も撮影されているが、この時期の植生景観は、明治24年(1891年)に小田切春江の息子・小田切春陵(1857~1902)が描いた『熱田神社並別宮境内図』(図6)を参照した。この絵図は細部まで描かれた79cm×385cmもの大きな絵巻物で、所蔵する熱田神社宝物館でも部分しか展示されたことがないという。2014年5月21日に特別拝観させていただき、分割して撮影した写真を合成したものを参照した。なお、明治時代前半には明治7年(1874年)に『熱田神社神境図説』(作者不詳)が、明治15年(1882年)に小田切春江により『官幣大社熱田神社真景図』が描かれているが、いずれも本殿裏の樹林にいわゆる「金雲」が描かれて一部が隠されているため、参考程度にとどめた。

(3) 絵図の読み取り

小椋(1992, 2012)の手法に倣い、樹種はおおまかに、スギタイプ(円錐形の樹形の針葉樹)、マツタイプ(アカマツ・クロマツなどを含む)、広葉樹タイプ、タケ類、の4タイプに分けて読み取った。広葉樹については、更に種同定ができそうなものについては具体的な樹種を挙げた。また、現在神域となっている本殿裏の樹林の境界の構造物の有無にも注目した。

江戸時代後期の『熱田宮全圖』と明治時代の『熱田神社並別宮境内図』については、俯瞰図であり、正確な面積比とはならないものの、4タイプに分けた樹種ごとにGISソフト上でポリゴンを作成して面積を求め、面積比を算出した。GISソフトはArcGIS 10.3(ESRI社製)を用いた。

結果

(1) 時代ごとの樹種構成

1) 中世

室町時代の1529年に描かれた『熱田社参詣曼荼羅図』(図2)では、現在は神域となっている本殿上(北)側の樹林(雲見山)は、最北部までは描かれていないものの、スギタイプの樹林に広葉樹タイプが混じる絵が描かれていた。図右上には広葉樹タイプの大木が描かれていた。境内や参道周辺には多くのマツタイプの樹木や白い花が満開の広葉樹タイプが描かれていた。特に拝殿右手前には赤い柵に囲まれた中に植えられた白い花が疎らに咲く広葉樹タイプが描かれていた(図2b)。本殿近くや本殿右(東)側には赤い花卉で中央が黄色い花の広葉樹タイプも描かれていた(図2c)。わかりにくいのが、おそらくタケ類と考えられる植物も多数描かれていた(図2d)。緑の葉の広葉樹が1本拝殿右横に描かれていた(図2e)。図中央よりやや左の神宮寺境内には枝垂れ形の樹木が描かれていた(図2f)。図中央よりやや下の八剣宮の背後にはスギタイプの針葉樹林、前側には赤い花の広葉樹タイプが描かれていた。図右上や図中央下端にはヨシ *Phragmites australis* (Cav.) Trin. ex Steud. と考えられる草本のような植物も描かれていた(図2g)。なお、1560年の桶狭間の戦いで織田信長は熱田神社で戦勝祈願を行い、勝利後お礼として土堀(信長堀)を寄進したが、この図はそれ以前に描かれたものなので、信長堀は描かれておらず、門の両脇には板葺きの長い屋根が描かれていた。

2) 近世

江戸時代初期の1613年に描かれた『熱田社境内図』(図3)では、本殿背後(北側)の樹林(雲見山)の本殿に近い側や本殿西側、門の左(西)側の堀(信長堀)沿いにはスギタイプの樹木が描かれていた。また、境内の右(東)側や左(西)側にはマツタイプの樹木が描かれていた。なお、雲見山の上方(北側)の樹林は形状がはっきりしておらず、どのタイプか確定できなかった。なお、本殿の北側から西側の樹林は柵で囲われていたことがわかった。

江戸時代後期の1806年に描かれた『熱田宮全圖』では、本殿背後(左(北)側)の樹林(雲見山)の大部分はス

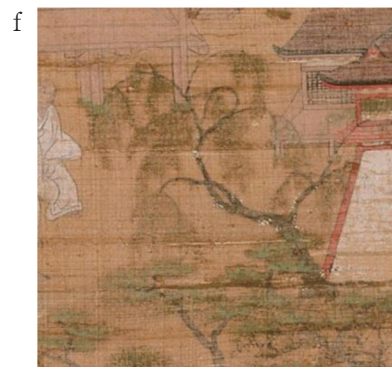
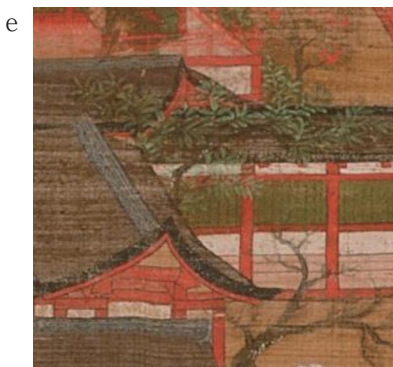
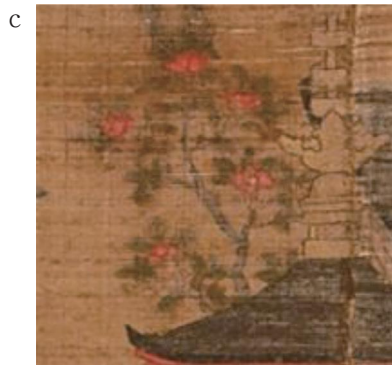
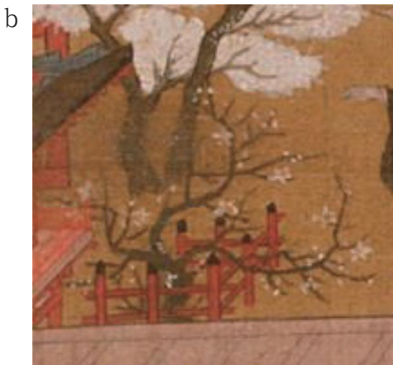


図2 『熱田社参詣曼荼羅図』（徳川美術館所蔵 © 徳川美術館イメージアーカイブ/DNPartcom）
Figure2. "Astuta-sha sankei mandara-zu" (Reprint by permitting from Tokugawa Art Museum/DNPartcom.)



図3 『熱田社境内図』(部分)
 矢印で指した線が柵と考えられる。(名古屋市博物館より許可を得て編集して掲載)
 Figure 3. "Atsuta-sha keidai-zu" (partial view)
 The lines which the arrows pointed are thought to be the fences. (Reprint by permitting from Nagoya City Museum.)

ギタイプの樹木が描かれ、本殿に近い側にはマツタイプの樹木が描かれていた。本殿背後の樹林（雲見山）には所々に赤い葉の樹木が描かれていた。なお、本殿と雲見山の間には土手が描かれ、その上に末社と柵が描かれていた。本殿の上（東）側には広葉樹タイプの大木が2本、本殿の下（西）側には広葉樹タイプの大木が2本、本殿の右（南）側には広葉樹タイプの樹木が1本描かれていた。門の両脇の堀（信長堀）沿いや参道にはマツタイプの樹木が描かれていた。また、鳥居の上（東）側や参道下（西）側の神宮寺境内には、広葉樹タイプの大木が描かれていた。斜め上方から描かれた図で、縮尺も正確ではないと考えられるものの、本殿背後から西側の樹林部分をスギタイプ・マツタイプ・広葉樹タイプに色分けし（図4）、GISソフトを用いて面積比を算出してみたところ、スギタイプが59%、マツタイプが16%、広葉樹タイプが25%であった。

『熱田宮全圖』後の1826年以降に同じく高力種信が描いた『熱田祭典年中行事図会』（図5）の各図は、背景の樹木がより写実的に描かれていた。本殿背後（北側）

凡例

植生タイプ

- スギタイプ
- マツタイプ
- 広葉樹タイプ



図4 『熱田宮全圖』の本殿背後から西側の樹林部分をスギタイプ・マツタイプ・広葉樹タイプに色分けした図
 Figure 4. Distributions of cedars, pines and broad-leaf trees in the back and the western part of the main shrine in the "Atsuta-no-miya zen-zu".

の樹林（雲見山）や本殿西側の大部分はスギタイプの樹木が描かれていたが、本殿に近い側にはマツタイプや広葉樹タイプの樹木が描かれていた（図5a, c, f, h）。なお、本殿裏に位置する一御前社を描いた場面（図5l）には土手と柵が描かれ、柵の内（左）側の樹林が雲見山に相当

するが、林縁部には、旧暦で十月下旬の場面であるため常緑の照葉樹と考えられる広葉樹タイプの樹木が描かれていた。参道沿いのマツタイプの幹は赤茶色で描かれていた (図5d, e)。また、広葉樹タイプの大木も鳥居横 (図5d, e) や神宮寺境内 (図5b) に描かれていた。境内南西側の信長堀と西門からの参道との間にはスギタイプの樹林があり、西側の堀沿いにはマツタイプと広葉樹タイプも描かれていた。

3) 近代

明治時代中期の1891年に描かれた『熱田神宮並別宮境内図』(図6a)では、本殿背後(北側)の樹林(雲見山)の大部分は広葉樹タイプの樹木が描かれ、本殿に近い側や本殿西(下)側にはスギタイプの樹木が描かれていた。本殿西(下)側のスギタイプは若干小さめで、密に生えているように描かれていた。参道沿いにはマツタイプの樹木が描かれていた。また、鳥居横や(神仏分離で転出した)神宮寺境内跡内、本殿上(東)側のクスノキ巨木や拝殿横のクスノキも描かれていた。本殿背後から西側の樹林部分をスギタイプ・マツタイプ・広葉樹タイプに色分けし(図6b)、GISソフトを用いて面積比を算出してみたところ、江戸時代後期の1806年に描かれた『熱田宮全圖』からはスギタイプが59%から25%に減少し、広葉樹タイプが25%から74%以上に増加し、マツタイプがほとんど見られなくなっていた。

考察

(1) 時代ごとの樹種構成の検証

1) 中世

室町時代の1529年に描かれた『熱田社参詣曼荼羅図』(図2)からは、現在は神域となっている本殿上(北)側の樹林(雲見山)は、スギタイプの樹林に広葉樹タイプが混じる植生と推定された。室町時代成立と推定される『熱田講式』(『熱田神宮史料 縁起由緒編』(熱田神宮宮庁, 2002)所収)にある「熱田講和讃」には「四面八町一夜ニソ、俄ニ林ト成ケル、霊木其数多レト、春日祭ル梅ノ宮、桜ノ宮ソ盛ナル、夏ハ手毎ニ榊取、人モヤ民木宮木引、秋ハ紅葉ノ手向山、御幸ノ松ソ名モ高、冬モ常盤ノ千枝杉、百枝ノ松ニソ枝カハス、檜槻梧村々ニ、雪ノ白綿掛ヌレハ、花見山トソ名ケル」とある。「花見山(おそらく「雲見山」のこと)」の説明が「冬モ常盤ノ千枝杉」からなのか、「檜・槻・梧」からなのか、あるいは「雪ノ白綿」からなのか解釈が難しいが、「千年杉」や「百枝ノ松」は独立した霊木を指している可能性も考えられる。「檜」は常緑針葉樹でスギタイプのヒノキ、「梧」は落葉広葉樹のアオギリ *Firmiana simplex* (L.) W.F.Wight、「槻」は落葉広葉樹のケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino を指すと一般的に考えられている。アオギリは紀伊半島と伊豆半島には自然分布するとされるが(大橋ほか, 2017)、愛知県では人為分布とされているので(小林, 2012)、現在も社叢内に生育が

表2 『熱田祭典年中行事図会』の参照した場面

Table 2. The paintings from "Atsuta saiten nenchu-gyouji zue" referred in this study.

巻	ページ	題名	場所	植生
a)	1 p10-11	元日 辰刻神供調進	本殿北・西	手前に常緑広葉樹、後方にスギタイプ
b)	1 p40-41	其二	神宮寺	右端にクスノキ大木
c)	2 p14-15	正月十一日 踏歌神事	本殿西	後方にスギタイプ
d)	2 p26-27	正月十一日 踏歌神事 其七	参道	松並木に広葉樹混じる
e)	3 p24-25	正月十五日 歩射神事 其五 射場惣図	参道	松並木に広葉樹混じる
f)	6 p30-31	三月十五日 舞楽場所惣図	本殿北	後方にスギタイプ
g)	7 p40-41	五月五日 馬塔 其八	本殿前西	スギタイプ
h)	9 p8-9	七月三日 大宮大掃除	本殿北	手前に広葉樹、背後にマツタイプ、更に後方にスギタイプ
i)	10 p50-51	十二月大晦日 参宮の絵 其二	本殿前西	左手前はスギタイプ、右手前は広葉樹タイプ
j)	10 p52-53	十二月大晦日 参宮の絵 其四 鎮皇門前	本殿前西	スギタイプ
k)	10 p56-58	十二月大晦日 其五 簀屋町の絵	本殿北西	スギタイプ
l)	10 p22-23	十月下旬 御致齋 其三 一御前社洗米を供	本殿北	垣根の背後に常緑広葉樹

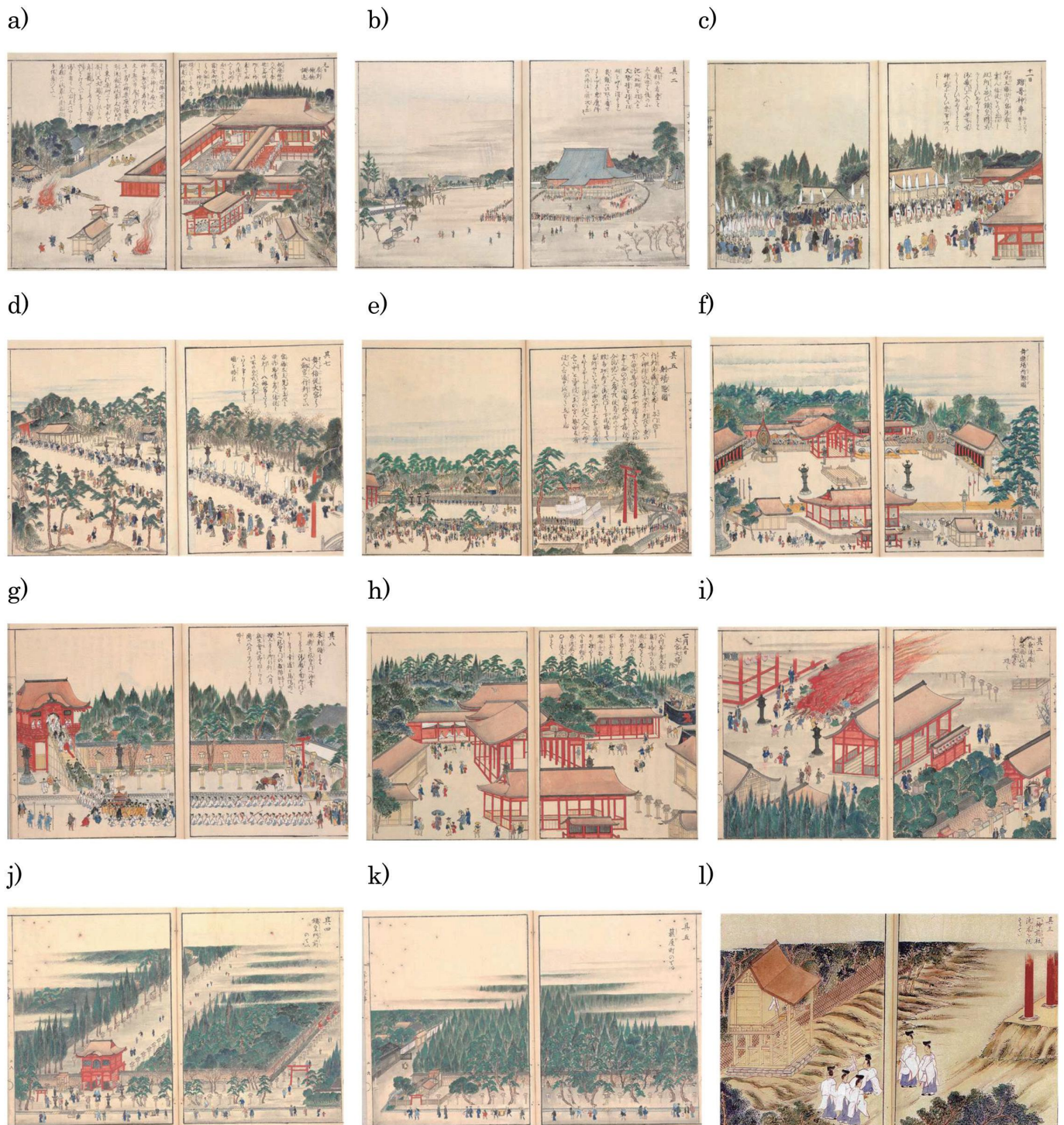


図5 『熱田祭典年中行事図会』（一部）（名古屋市蓬左文庫より許可を得て転載）
 Figure 5. "Atsuta saiten nenchu-gyoyui zue" (selected figures Reprint by permitting from Hosa Library, City of Nagoya).

見られるものの(筆者ら個人観察), 熱田神社が当地に成立した当初からアオギリが自生していたとは考えにくい。しかし, 中国文化の影響を受けて, アオギリは古くから日本でも庭園に植栽されていたとされる(飛田, 2002)。ケヤキは現在も大木が少数であるが本殿背後の樹林に生育しており(筆者ら個人観察), 沖積平野にも洪積台地にも広く分布する種であるので, 古くから自生していたと考えられる。江戸時代初期の延宝5年(1677年)に書かれた『熱田太神宮正縁起一卷』(『熱田神社史料 地誌編』(熱田神社宮庁, 2015)所収)には, 前述のように「一夜の間」に「檜・椿・梧・槻」の「叢林」が出来たと記されている。しかしこの縁起は江戸時代初期に記されたもので, 熱田神社が根本的な縁起としている寛平2年(890年)にまとめられたという(実際の成立は鎌倉時代とも考えられている)『尾張国熱田太神宮縁起 一卷』(『熱田神社史料 縁起由緒編』(熱田神社宮庁, 2002)所収)にはこれらの具体的な樹種は出てこない。室町時代成立と推定される『熱田講式』(『熱田神社史料 縁起由緒編』(熱田神社宮庁, 2002)所収)にある「熱田講和讃」には先述のように, 「四面八町一夜ニソ, 俄ニ林ト成ケル, 霊木其数多レト, …」とあるが, 「霊木其数多レト」以降の記述は当時存在した境内の名所や

霊木を紹介したもので, 一夜にして林となった際の樹種を述べたものではないと考えられる。したがって, 少なくとも室町時代から江戸時代初期以前の熱田神社の社叢に, これらの挙げられた樹種が生育していた時期があったと考えてもよいだろうが, 創建当初からこれらの樹種があったかについては疑問が残る。

また「雲見山」以外の部分では, 現在の「ならずの梅」の位置である拝殿右手前に赤い柵に囲まれた中に植えられた広葉樹タイプ(図2b)が疎らに白い花を咲かせていることから, 早春のウメ *Armeniaca mume* Siebold の開花時期の絵と考えられた。本図の奥書には享禄2年2月吉日とあったと模写が掲載されている『尾張名所図会』に記されているようで(新修名古屋市史編集委員会, 1998), 季節は一致する。なお, 同時代の『熱田神社古絵図』にもこの位置に樹木が描かれているが, 赤い花が描かれていた。また, 江戸時代後期の『熱田祭典年中行事図会』にも同じ位置にウメと考えられる絵(図5i)があり, 『熱田宮全圖』にも図中に文字で「ナラズノ梅」の位置が示されている(現在の本殿・拝殿は遷宮により西に移動しているため, 「ならずの梅」は現在は神楽殿の前にある)。南北朝時代から室町時代前半までの口伝を取りまとめられたものと考えられている『熱田

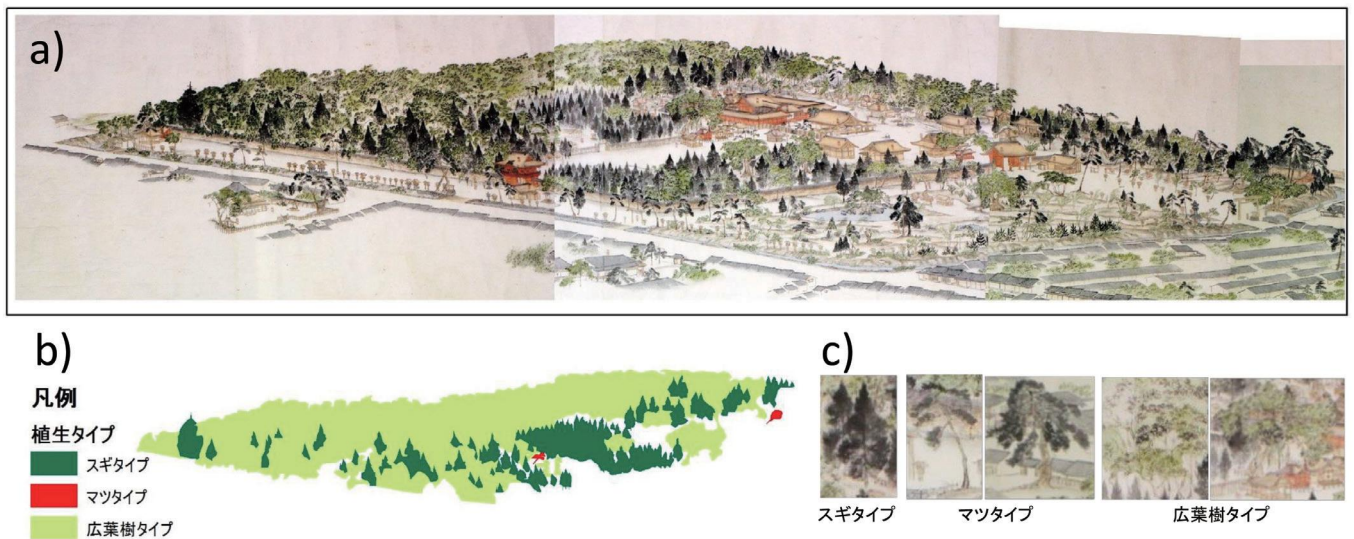


図6 『熱田神社並別宮境内図』(熱田神社宝物館の許可を得て撮影し, 掲載)
 a) 部分, b) 本殿背後から西側の樹林部分をスギタイプ・マツタイプ・広葉樹タイプに色分けした図, c) 各樹種タイプの典型例
 Figure 6. “Atsuta-jingu narabini betsugu keidai-zu” (Photographed by permitting from Atsuta Shrine).
 a) Partial view. b) Distributions of cedars, pines and broad-leaf trees in the back and the western part of the main shrine.
 c) Typical illustrations of each tree types.

太神宮秘密百録』(『熱田神宮史料 縁起由緒編』(熱田神宮宮庁, 2002) 所収) には、「次鴨イ霊木三本在之、一ハ西ノ方屋ノ前ニ松有、春日イ鴨大明神、一ハ楠ノ木御前、春日大明神也、一ハ海蔵門東方脇ノ梅木アリ、交野イ松尾ノ大明神也、…」や「当社之中之木ニ、楠之木ハ賀茂大明神木也、右之上中門之脇之松ハ春日大明神木也、毎水(海)蔵門之左之脇[ノ梅脱]ハ平野大明神ノ木也」との記述があり、「海蔵門東方脇ノ梅木」や「梅脱」が「ならずの梅」を指していると考えられる。また、これらの記述からはクスノキ(「楠ノ木」「楠之木」)やマツ(「松」)が境内にあったことが読み取れ、「鴨イ霊木」はイチョウ *Ginkgo biloba* L. (鴨脚) があったことを指している可能性も考えられる。

『熱田社参詣曼荼羅図』(図2)の境内各地の白い花が満開の広葉樹タイプもウメ(白梅)、八剣宮の前側の赤い花の広葉樹タイプもウメ(紅梅)と考えられるが、この時代の社寺境内には桜や桃が植栽されていたこともあるので(飛田, 2002)、ウメ以外の春に花を咲かせる樹木の可能性も残る。先述の室町時代成立と推定される『熱田講式』(『熱田神宮史料 縁起由緒編』(熱田神宮宮庁, 2002) 所収)にも「梅ノ宮」と「桜ノ宮」が登場している。

また、本殿近くや本殿右(東)側には赤い花卉で中央が黄色い花の広葉樹タイプ(図2c)は、その花の形態と早春に咲いていることからヤブツバキ *Camellia japonica* L. と考えられる。

拝殿右横に描かれていた緑の葉の広葉樹(図2e)は、早春に葉をつけていることから常緑広葉樹と考えられる。熱田神宮宝物館の内田学芸員によると、かつて拝殿横にはクスノキを植えることとされていた。したがって、この木はクスノキの可能性が考えられるが、『熱田太神宮秘密百録』(『熱田神宮史料 縁起由緒編』(熱田神宮宮庁, 2002) 所収)には「大宮ノ御前ニ椎本ハ、天神七代地神五代ノ表木也」とあり、また江戸時代の『熱田神籙抄』(『熱田神宮史料 縁起由緒編』(熱田神宮宮庁, 2002) 所収)には「祭文殿ノ前御白砂有、此内東ノ方ニヨセテ、昔ヨリ椎本一株ヲ植ユ」とあり、クスノキではなくシイ類であった可能性もある。この位置の常緑広葉樹は明治時代中期の1891年に描かれた『熱田神宮並別宮境内図』(図6)まで確認できる。また、図右上に描

かれていた広葉樹タイプの大木は、現存または近代までこの辺りの位置に生育していたクスノキと考えられる。クスノキは愛知県では自生ではないが(小林, 2012)、熱田神宮にはかつて7本の大楠があった。現存するクスノキの大木のうちの1本は弘法大師(774~835年)によるお手植えと伝えられ(『熱田太神奥之院愛染明王并弘法大師之略縁起』(『熱田神宮史料 縁起由緒編』(熱田神宮宮庁, 2002) 所収)では「樟を七所に植」とある)、『熱田社参詣曼荼羅図』が描かれるまでに700年程度が経過しており、本種の旺盛な成長(田端ほか, 2004)から考えて、当時既にクスノキの大木があったと考えてもおかしくはない。神宮寺境内に描かれていた枝垂れ形の樹木(図2f)は、シダレヤナギ *Salix babylonica* L. と考えられ、この時代以前から中国文化の影響を受けて国内の庭園や寺院でもよく植栽されていたことが知られている(飛田, 2002)。

2) 近世

江戸時代初期の1613年に描かれた『熱田社境内図』(図3)では、本殿背後(北側)の樹林(雲見山)の本殿に近い側や本殿西側にはスギタイプの樹木が描かれていたが、雲見山の上方(北側)の樹林は形状がはっきりしておらず、どのタイプか確定できなかった。江戸時代後期の1806年に描かれた『熱田宮全圖』(図4)では、本殿背後(北側)の樹林(雲見山)の約6割はスギタイプの樹木が描かれていた。なお、本殿背後の樹林(雲見山)に所々描かれていた赤い葉の樹木は、現在の植生から推測すると、紅葉するモミジ類かハゼノキ *Toxicodendron succedaneum* (L.) Kuntze の可能性が考えられる。また、1826年以降に描かれた『熱田祭典年中行事図会』(図5)では、本殿背後(北側)の樹林(雲見山)や本殿西側の大部分はスギタイプの樹木が描かれていたが、本殿に近い側にはマツタイプや広葉樹タイプの樹木が描かれ、特に本殿裏の林縁部には旧暦で10月下旬の場面で濃い緑色の葉が描かれていることから照葉樹と考えられる広葉樹タイプが描かれていた(図5l)。また『熱田宮全圖』と『熱田祭典年中行事図会』の絵を描いた高力種信の弟子の小田切春江によって1838年に描かれた『名陽見聞図会 第五編 上』の「端午馬の頭」の図は、鳥居から本殿方向を描いた図で、本殿後方の樹林のスカイラインが

からうじて見えるが、スギタイプで描かれていた。同じく小田切春江によって描かれた『尾張名所図会 前編巻三』の「熱田大宮全図」では、現存するクスノキと考えられるものも含む数本の巨樹や、本殿北側のスギタイプの樹林と本殿との間にマツタイプと広葉樹タイプの樹木が描かれていた。

このように、林縁部を除けば、雲見山の大部分は中世から引き続き近世もスギタイプの針葉樹林であったと考えられる。貞享3年(1686年)の遷宮に関して元禄期に大原武直が記した書である『熱田要録記』(『神道体系神社編19熱田』(小島・井後, 1990)所収)には、「一大宮假御殿、寶田社之西、杉林ニ立申候」との記述があり、また元禄12年(1699年)の『熱田宮旧記』(『熱田神宮史料 縁起由緒編』(熱田神宮宮庁, 2002)所収)には「神さひていやかけ高き杉松に雲みる山は幾代へぬらむ」という慶長9年(1604年)に雲見山を詠んだ和歌が紹介されている。スギとヒノキの混同がないとは言いつても、少なくともスギタイプの針葉樹林があったことは文字の記録からも確かであると考えられる。なお、遷宮時に一時的に御神体を移す「仮殿」は、『熱田宮全圖』では雲見山の下方の樹林内に描かれている建物がそれであると絵に貼られていた「付箋」には記されていたとのことである(川口, 2012)。京都の社叢では境内のスギを伐採したり植栽したりして資源利用されていたことが近年明らかにされているが(今西ほか, 2008, 2011)、今のところ熱田神宮の社叢では資源利用の記録は公刊された『熱田神宮史料』などからは見つけられていない。

『熱田宮全圖』や『熱田祭典年中行事図会』では本殿の上(東)側には広葉樹タイプの大木が2本、本殿の下(西)側には広葉樹タイプの大木が2本、本殿の右(南)側には広葉樹タイプの樹木が1本、鳥居の上(東)側や参道下(西)側の神宮寺境内にも広葉樹タイプの大木がそれぞれ1本描かれていたが、いずれも現存または近代までこの辺りの位置に生育していたクスノキ巨木と考えられる。

また、1719年には日本書記千年記念で陰陽松3600本等の植樹の記録があるが(名古屋市役所, 1980)、『熱田祭典年中行事図会』の参道沿いのマツタイプの幹は赤茶色で描かれており(図5d, e)、アカマツも植栽された可能性が高い(現在、参道沿い等には主にクロマツが植栽

されている)。

3) 近代

明治時代中期の1891年に描かれた『熱田神宮並別宮境内図』(図6)では、本殿背後(北側)の樹林(雲見山)の約4分の3は広葉樹タイプの樹木が描かれ、本殿に近い側や本殿西側など残りの4分の1はスギタイプの樹木が描かれていた。本殿西側のスギタイプが密に生えているように描かれていた部分は位置的に『熱田宮全圖』で描かれていた「仮殿」の跡地に当たり、人為的に針葉樹が密に植栽された可能性がある。同じ小田切春江により明治15年(1882年)に描かれた『官幣大社熱田神宮真景図』は、本殿裏の樹林にいわゆる「金雲」が描かれて一部が隠されているが、やはり広葉樹タイプが大部分を占め、所々にマツタイプとスギタイプが描かれていた。これらの近代・明治時代の図では、江戸時代後期の1806年に描かれた『熱田宮全圖』(図4)からはスギタイプが減少し、広葉樹タイプが増加していた。また、マツタイプがほとんど見られなくなっていた。明治時代に入り、熱田周辺には1886年(明治19年)に鉄道(汽車)が通り、また工場も多数立地するようになった。昭和初期の宮域拡張時には、熱田神宮林において煙害によって針葉樹が衰退傾向にあったことから、明治神宮の植栽に倣って照葉樹等の煙害に強い樹種が選ばれている(熱田神宮宮庁, 1942)。1891年に描かれた『熱田神宮並別宮境内図』は鉄道が開通後まだ5年間で、また1882年に描かれた『官幣大社熱田神宮真景図』は鉄道開通前なので、この時点までの針葉樹の衰退の原因が汽車による煙害が主要因とは結論できないが、近世から近代にかけて、針葉樹林から広葉樹林へと大きく植生景観の変化が起こったようだ。約80年前発行の『熱田神宮境域の植物』(熱田神宮庁, 1942)にも、「本境域は熱田驛、貨物操車場始め、重工業地帯に接近してゐる爲に煤煙の被害が甚大で、スギ、マツの類は、その生存旦夕にせまつてゐる」との記述がある。

(2) 神域を囲む柵

神社では「禁足地」と呼ばれる立ち入りや一草一木の採取も認めない神域が設定されていることがあるが、山体そのものが御神体とする三輪山・大神神社でさえも江

江戸時代以降のものとのことであることが近年明らかにされている(是澤, 2014)。また、社叢のマツ類を伐採するなどの資源利用も行われていた神社もあったことが明らかにされている(今西ほか, 2008, 2011)。江戸時代後期の『熱田祭典年中行事図会』の本殿裏に位置する一神前社を描いた場面(図51)には土手と柵が描かれ、『尾張名所図会 前編卷三』の「熱田大宮全図」でも本殿北の樹林の手前に土塁と柵が描かれていた。また、江戸時代初期の1613年の『熱田社境内図』(図2)や1752年の『張州府志 附図』でも本殿背後の樹林は柵で囲われていた。この柵内への立ち入り制限の程度や木材利用がされていたのかについては不明だが、熱田神宮では江戸時代以前から神域保護が行われていたことが示唆される。

まとめ

現在はクスノキなどの照葉樹とムクノキ・イチヨウなどの落葉樹の大木が混在する植生となっている熱田神宮の社叢であるが(名古屋営林局・緑のプロジェクトチーム, 1978)、近年のいくつかの他の関東や関西の社叢における研究(小椋, 1992, 2012; 鳴海・小林, 2006; 今西ほか, 2008, 2011)で示されているのと同様に、絵図からは中世・近世はスギタイプの針葉樹が主体で林縁などにマツタイプや広葉樹がある程度で、近代以降に広葉樹林化が進んだことが明らかになった。かつての針葉樹林が人為的に植栽されたものか、資源利用されていたのかについては、今のところ熱田神宮では記録が見つからない。社叢は永く人手が入らず地域の原植生を伝える森として認識されてきたが(上田, 1984)、現在の熱田神宮の神域の樹林は必ずしも原植生そのものの姿を伝えているとは言えないと考えるべきであろう。しかし、現在は名古屋の市街地に囲まれた熱田神宮の特に神域には、名古屋市内では稀な陸産貝類のヒルゲンドルフマイマイ *Trishoplita hilgendorfi* (Kobelt) や草本のウラシマソウ *Arisaema thunbergii* Blume subsp. *urashima* (H.Hara) H.Ohashi et J.Murata などの生物が生き残っている(名古屋市環境局環境企画部環境活動推進課, 2015a, 2015b)。熱田神宮の縁起類には、「一夜の間」に水田の真ん中に「叢林」が出来たと記されているが、熱田神宮の柵に囲まれた神域はやはり古い時代の熱田台地の森林性生物相を伝える森としての役割を一定程度果た

してきたという評価も否定してはいけなると考えられる。

謝辞

本研究を進めるにあたり、熱田神宮庁、徳川美術館、名古屋市蓬左文庫、名古屋市博物館には絵図の閲覧や掲載許可をいただいた。熱田神宮との交渉では、当時ことや生物多様性センターの専門員であった中村肇氏にお世話になった。また2名の査読者による意見も論文をより良くする上で大変役立った。記してこれらの方々に謝意を表します。

引用文献

- 熱田神宮宮庁. 1942. 熱田神宮境界の植物. 熱田神宮宮庁, 名古屋. 59pp.
- 熱田神宮宮庁. 1966. 熱田神宮昭和造営誌. 熱田神宮宮庁, 名古屋. 561pp.
- 熱田神宮宮庁. 2002. 熱田神宮史料 縁起由緒編. 熱田神宮宮庁, 名古屋. 460pp.
- 熱田神宮宮庁. 2015. 熱田神宮史料 地誌編. 熱田神宮宮庁, 名古屋. 557pp.
- 藤沢 彰. 1988. 熱田神宮のいわゆる「享祿古図」以前の社殿について. 昭和63年度日本建築学会近畿支部研究報告集, 28: 857-860.
- 飛田範夫. 2002. 日本庭園の植栽史. 京都大学学術出版会, 京都. 435pp.
- 今西亜友美・吉田早織・今西純一・森本幸裕. 2008. 江戸時代中期の賀茂御祖神社の植生景観と社家日記にみられる資源利用. ランドスケープ研究, 71: 519-524.
- 今西亜友美・杉田そらん・今西純一・森本幸裕. 2011. 江戸時代の賀茂別雷神社の植生景観と日本林政史資料にみられる資源利用. ランドスケープ研究, 74: 463-468.
- 株式会社イビソク. 2009. 熱田神宮内遺跡-神楽殿及びその周辺の発掘調査報告書-. 株式会社イビソク, 大垣. 30pp.
- 川口高風. 2012. 熱田白鳥山法持寺史. 白鳥山法持寺, 名古屋. 725pp.
- 川口高風. 2014. 『熱田 白鳥山法持寺史』補遺考. 禅研究所紀要42: 119-154.
- 小林元男. 2012. 愛知県樹木誌. 個人出版. 622pp.
- 小島鉦作・井後政晏. 1990. 神道体系神社編19熱田. 神

- 道大系編纂会, 東京. 632pp.
- 是澤紀子. 2014. 近世初期三輪山における禁足の制定とその景観-神社の禁足地とその景観に関する研究. 日本建築学会計画系論文集, 79 (700) :1433-1439.
- 名古屋営林局・緑のプロジェクトチーム. 1978. 熱田神宮の森の構造. 熱田神宮林苑保護委員会(編). 熱田神宮林苑保護委員会報告書, pp.1-23. 熱田神宮宮庁, 名古屋.
- 名古屋市博物館. 1986. 猿猴庵とその時代-尾張藩士の描いた名古屋-. 名古屋市博物館, 名古屋. 64pp.
- 名古屋市環境局環境企画部環境活動推進課. 2015a. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや2015-動物編-. 名古屋市環境局環境企画部環境活動推進課, 名古屋. 504pp.
- 名古屋市環境局環境企画部環境活動推進課. 2015b. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや2015-植物編-. 名古屋市環境局環境企画部環境活動推進課, 名古屋. 385pp.
- 名古屋市経済局観光貿易課. 1979. 芭蕉さまと名古屋. 名古屋市, 名古屋. 103pp.
- 名古屋市役所. 1980. 名古屋市史 社寺編. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋. 1064pp.
- 鳴海邦匡・小林 茂. 2006. 近世以降の神社林の景観変化. 歴史地理学, 48(1): 1-17.
- 小椋純一. 1992. 絵図から読み解く人と景観の歴史. 雄山閣出版株式会社, 東京. 238pp.
- 小椋純一. 2012. 森と草原の歴史. 古今書院, 東京. 343pp.
- 大橋広好・門田裕一・邑田 仁・米倉浩司・木原 浩. 2017. 改訂新版 日本の野生植物 4. 平凡社, 東京. 348pp.
- 瀬田勝哉. 2000. 木の語る中世. 朝日選書, 東京. 254pp.
- 新修名古屋市史編集委員会. 1997. 新修名古屋市史 第1巻. 名古屋市, 名古屋. 831pp.
- 新修名古屋市史編集委員会. 1998. 新修名古屋市史 第2巻. 新修名古屋市史編集委員会. 2008. 名古屋市, 名古屋. 868pp.
- 新修名古屋市史編集委員会. 2008. 新修名古屋市史資料編 自然. 名古屋市, 名古屋. pp525.
- 田端敬三・橋本啓史・森本幸裕・前中久行. 2004. 札の森におけるクスノキおよびニレ科 3 樹種の成長と動態. ランドスケープ研究67: 499-502.
- 上田 篤. 1984. 鎮守の森. 鹿島出版会, 東京. 249pp.